

ジオロジー鉄道の旅 とさでん栈橋編

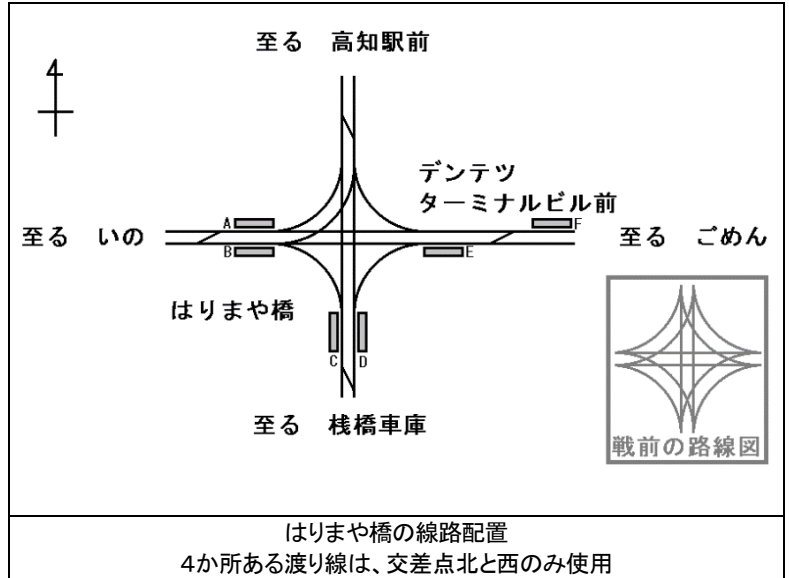
南 寿宏

とさでん交通駅前線・栈橋線 停留所コード一覧(南寿宏・私案)					
TN01	はりまや橋	TS01	はりまや橋	TS05	栈橋通三丁目
TN02	蓮池町通	TS02	梅の辻	TS06	栈橋通四丁目
TN03	高知橋	TS03	栈橋通一丁目	TS07	岸壁通
TN04	高知駅前	TS04	栈橋通二丁目	TS08	栈橋通五丁目

1 TS01 はりまや橋

はりまや橋交差点に電停が6つあること及びそれらの役割は、本会報第62号に詳述しているから、省略する。北からの右折、西からの左折、東からの左折が重なる、いわゆる「トリプルクロス」が平日の朝に2回見られる可能性があることは、本日(2024年1月)現在も変わらない。機会があれば、8:10ごろもしくは8:50ごろに行ってみられたい。

右図CとDのすぐ南にある渡り線は平常ダイヤでは使われず、赤錆が浮き草ぼうぼうであるが、高知龍馬マラソン開催中は使われる。当日は、はりまや橋～栈橋間は、電停Cで折り返す。



今でこそ、この電停が乗り換え用として作用しているが、開通当初は、西の堀詰電停から鏡川を渡った梅ノ辻電停までは、別経路を走っていた。

右に当時の路線図を載せる。

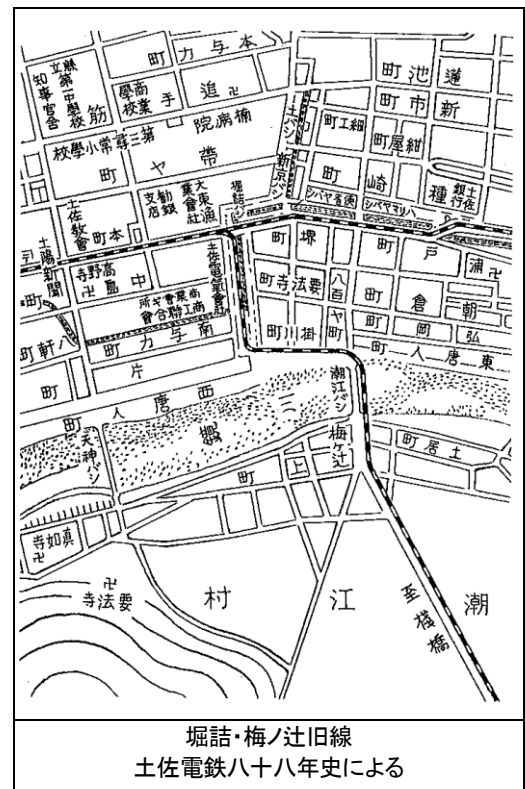
いつの地図かは不明だが、とても興味深い地図である。

- ・ 縣立第一中學校→高知追手前高等学校
- ・ 第三尋常小學校→追手前小学校→オーテピア
- ・ 商業學校→栈橋移転→本宮町移転→高知商業高等学校

路線の分岐部分に土佐電氣會社とある場所が当時の本社で、現在はセブンイレブンとなっている。その旧本社所在地から潮江橋までの廃線跡は現在も道路として残っているので、地図を片手に散策されるのも一興。堀詰電停から南への線路は旧堀を埋め立てており、今は中央分離帯が歩道として整備されている。

旧町名も散見される。掛川町というのは、山内一豊入領時に旧領掛川から土佐にやって来た人々の居住地で、浦戸町、種崎町は浦戸湾入り口付近の人々を移住させてできた町である。現在のはりまや橋商店街は、以前は中種商店街だった。

この経路は、土讃線高知駅開業後の昭和3年に廃止された。



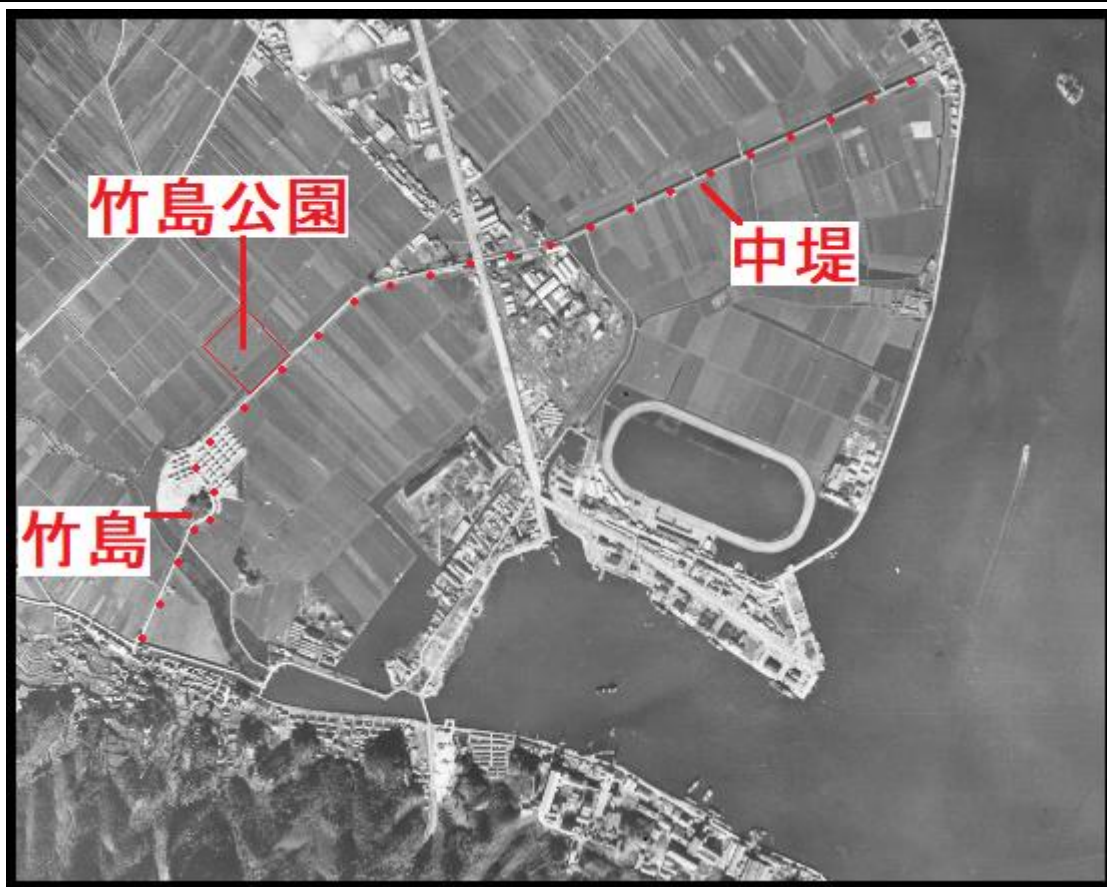
2 TS06 棧橋通四丁目

棧橋線の開業時は『中堤(なかづつみ)』といわれていて、1938年に現在の棧橋4丁目に改名された。中堤の名称が浦戸湾干拓の歴史を表していることは本会報第55号で述べた。電停交差点から東を見ると、道路がその周辺よりも1～2m高いことがお分かりいただければよい。

交差点の西1kmには、浦戸湾7島の1つ竹島があった。島そのものは周辺の宅地化に伴って土壌が削り奪われ、一部岩礁のみが残されている。場所は、とさでん交通の竹島町第二のバス停前。

電停交差点と竹島の間に、竹島公園がある。この公園は道路よりも10mほど高い。ここが以前の竹島かと思われそうだが、その場所は、航空写真(1952年アメリカ軍撮影)では水田だ(下図赤枠)。竹島公園は、数年前に南海トラフ地震の津波対策として造営された、高台公園である。

下図赤点線が中堤である。中堤の北側の黒い影が堤の高さの証拠である。竹島は周囲に団地が造成されているが、土壌削奪前で、島の姿を残しているように見える。



高知市潮江地区航空写真(1952年撮影 USA M211-158)
国土地理院ホームページより



竹島
残っているのは岩礁のみ



竹島公園
地形の変遷は google street view で確認できる

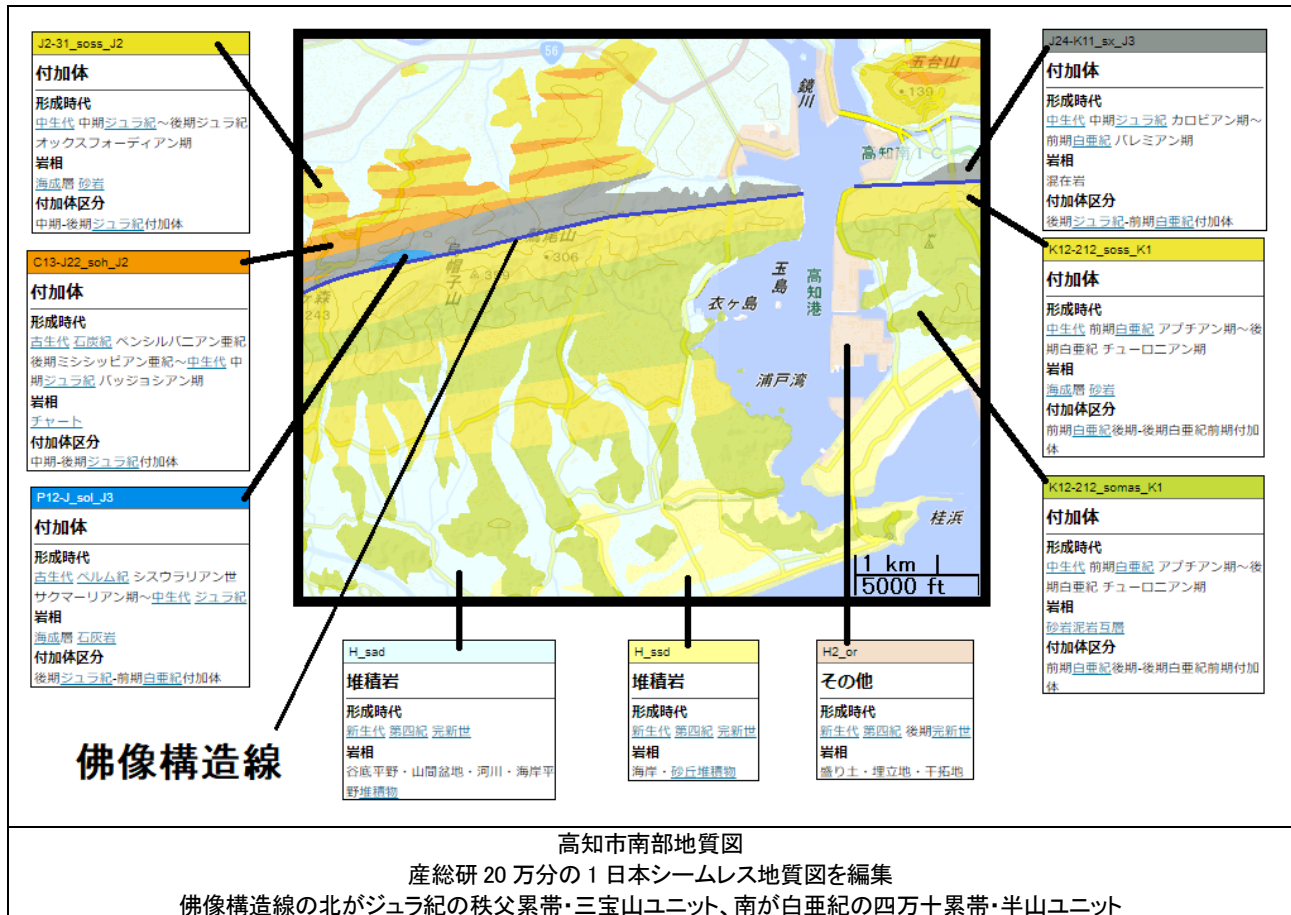


中堤(棧橋4丁目電停)
見よ、低地との高低差を！

3 TS08 棧橋通五丁目

とさでん交通棧橋線の終点。この地は、南の旧吾川郡長浜町、同浦戸村、長岡郡三里村等からの巡航船の発着場であった。大阪、名古屋、東京行きフェリーが到着していた高知港は1 km近く東。

電停の南に延びる山には、佛(仏)像構造線が走る。佛像構造線の北には、石灰岩が狭在する。土佐市の仁淀川沿いの石灰岩露頭には、鍾乳洞が発見されている(→県道土佐伊野線のトンネル内、天崎鍾乳洞)。佛像構造線は秩父累帯と四万十累帯の境界である。佛像というのは、土佐市の地名。



半山ユニット ハヤマユニット Hayama Unit
(前略)
新莊川層群は、付加コンプレックスとして、半山ユニット及び須崎一日野谷ユニット、陸棚斜面堆積物として、堂ヶ奈路層及び上組層からなる。半山ユニットは、砂岩勝ちの砂岩泥岩互層からなり、砂岩及び泥岩を伴う。アンモナイト化石から、その年代はアプチアン期後半～アルビアン期とされる(松本,1980)。須崎一日野谷ユニットは、須崎層及び日野谷ユニットから構成される。泥岩優勢な砂岩泥岩互層及び砂岩からなり、赤色ないし緑灰色をなす多色泥岩を伴う。アルビアン期後半～セノマニアン期のアンモナイト及び放射虫化石が産出する(松本,1980;平ほか,1980)。堂ヶ奈路層と上組層は、浅海生の二枚貝やアンモナイトなどの大型化石が産出し、陸棚斜面堆積物として考えられている(平ほか,1980)。堂ヶ奈路層は、泥岩・砂岩・砂岩泥岩互層・礫岩からなり、一部では鳥巢式石灰岩を伴う。二枚貝・アンモナイト化石から、堆積年代はパレミアン期後半～アプチアン期とされる(田代ほか,1981)。また石田(1978)の棚谷層と出原層も本層に含めた。堆積年代の上限は、セノマニアン期前半まで達する。上組層は、泥岩に砂岩を伴う。二枚貝や浮遊性有孔虫化石から、チューロニアン期とされる(青木・田代,1983)。
(後略)
[原ほか(2018): 産総研 20 万分の 1 地質図幅「高知」]

文献

原 英俊・青矢睦月・野田 篤・田辺 晋・山崎 徹・大野哲二・駒澤正夫(2018): 20 万分の 1 地質図幅「高知」(第 2 版)。産業技術総合研究所 地質調査総合センター

(ジオロジー鉄道の旅 とさでん交通の部 完)